

ロ
ず
さ
む
詩

五年生

阪田寛夫

「一年いぬの子

二年はにんじん

この通通るとはやされた

四月がくるたが思い出す

「三年さんかく

四年はよこめ

しゃがれた声がにくらいしい

あとなみtainな五年生

「五年、五年と

いはるな五年

ばくくもまけずに言っただけ

「五年ごぼうでなぐられた」

あのころ思うと

にやにやしちゃう

ことしはばくくが五年生

「ごぼうでぶっても平気だぞ」

阪田寛夫 小説家・詩人

ここに引用したような、一年から六年まで数え歌風にならべた悪口唄を(その元唄を)、むかし私は大阪の町で唱えていました。六年は、ろうやに入れたでした。こんな歌はきつとどこにもあつて、場所と時代によつて似たり違つたりしているでしょう。その上だれでも簡単にさし替えができます。何年か前、久しぶりにこの歌を思い出し、一年から五年までかけ上つて、さて、とふり返つたらこの詩ができました。